



# 才能論



川崎ゆきお

言葉巧みな人がいる。これは生まれつきが多い。言葉の使い方が上手い。同じことを別の言い方でもできる。それよりも言葉を使うときの、その場の使い方を心得ている。

「本、読んでます？」

「読んでません」

「世界が広がりますよ」

「映画はよく見えますが」

「あ、そう」

「映画の方が分かりやすいのです。小説で何か書いてあっても、どういうものか、見当が付かないことがあるけど、映画なら説明なしで分かる」

「風景とか、状況ですね」

「そうです。小説だと、主人公が何処にいて、相手はどのあたりにいるのかとか、そういう立ち位置や表情が見えないので」

「だから、それを言葉で説明していくのですよ。そのときの説明の仕方が参考になります」

「参考以前に、何処にいるのかがよく分かりません」

「想像が付くでしょ」

「はい」

「例えば自分で体験したことなどを相手に話すときに役立ちます。そういう風に説明していくのかと」

「映画より、小説の方が実用的なのですね」

「だから、より多く本を読んでいる人は、説明のバリエーションも広い」

「なるほど、しかし私の親友で、本など殆ど読んでいない人で、映画もあまり見ない人なんです、説明が上手いですよ」

「あ、そう」

「人の話をよく聞く人で、それで学習したんじゃないですか」

「ありますねえ。昔の人で、小学校しか出ていないのに、言葉が達人な人」

「そうでしょ。だから、小説も映画もあまり関係がないと思いますよ。言葉を知っていても使い方でしょ」

「その上、多くの読書を積み重ねれば、さらに」

「でも、本ばかり読んでいる友人もいますが、喋るとき、台本を読んでいるような、堅苦しい言葉で、そのままコピーしたような言葉遣いです」

「そう否定されると、先へ進めません」

「それは失礼しました」

「つまり、あなたは最初から持っている素質で決まると仰りたいのですね」

「それは脳の回路の問題じゃないですか。最初からそれがあるので、より磨きがかかって、回路が発達したのだと」

「それは言いっこなしなんです」

「なしですか」

「そうです。教育しても同じだということになりますから。やはり後天的なことが大事で、そこを磨くのが学習です。そうでないと先生の意味がない。教えても教えなくても同じだとすると、楽しみもない」

「ああ、そっちの問題がありましたねえ」

「これは才能論でして。危険なんです」

「どうしてですか」

「生まれが違うということになります」

「それは違うでしょ」

「そこで、最初から差が出てしまっは……ねえ」

「どういうことですか」

「人格の否定になります。あなたは生まれつきだめだと」

「そうなんですか、言葉が下手な人と上手い人の差はあまりないと思いますよ。それにどちらも欠点になりますし、長所にもなります。さらに、言葉遣いだけで人格などは決まらないでしょ。別の才能や素質に恵まれているかもしれませんし、たとえ平凡でも、それが非常に貴重な面もあるはずですよ。平凡だから助かったとか、平凡な人だから、普通の判断をしたとか」

「そこまで行くと、別の話になります」

「そうでしょ」

「ところであなたは、そういう意見というか発想は何処から得られました」

「え」

「だから、何処で学びました」

「さあ、覚えていませんが、おそらく体験からでしょ」

「本や映画は」

「雑音かもしれません」

「それは、また厳しい」

「よく言うじゃありませんか」

「え、何の話ですか」

「だから、それは本やドラマの中の話って」

「話が進まないようなので、このあたりでやめておきます」

「だから、その教材は買わないって、最初に言ったでしょ。粘りすぎですよ、あなた。他を当たって下さいな」

「はい、そうします」

了